

英語についての雑感



拒否された私の電話英語!

4月号で触れたように、スペイン語はローマ字読みの発音でもほぼ相手に通じると言えるでしょう。ところが、英語となるとそうはいきません。たぶん、読者の皆さんも経験されていると思いますが、bとv、lとr、sとth といった区別は日本人にはとても難しいものです。私も昨年6月、ショッキングな場に直面したのです。

「風と共に去りぬ」の出版70周年の取材でアトランタとニューオーリンズに行った時のことでした。アトランタは著者マーガレット・ミッチェルが住んでいた街で、近郊には「タラ」の舞台となったジョージズボロもあります。ニューオーリンズはスカーレットがレットと新婚旅行で訪れた港町です。

英語にはある程度自信のある自分でしたが、ホテルから航空会社にかけての電話のやりとりでは完全にその自信を喪失してしまったのです。電話の向こうで応答する器械に「あなたの英語がわからない、よく聞き取れない」と言われたのです。

アメリカ往復の切符は日本で買いましたが、アトランタからニューオーリンズ行きのフライトは、こちらに着いてから購入の予定でいました。主要都市間の便のこと、すぐにも取れると思ったからでした。

まず、コンチネンタル航空に電話すると、一度ハブ空港であるヒューストンに行き、そこから戻ることになるといいます。東京から一度、大阪に行き名古屋に戻るようなものです。そんな無駄なこととはできません。そこで、アトランタがハブ空港のデルタ航空に電話をしました。電話が殺到する多くの日本の企業もそうですが、最初の3段階まではダイヤルの番号を押すことによって器械が応答するようになっていました。

「出発はどこからですか?」と器械が聞く。私は「アトランタ」と応答。
「目的地はどこですか?」と聞かれると「ニューオーリンズ」と返事しました。

ところが……。なんと、どちらの場合も器械の応答は「聞き取れませんでした」。何回も、できるだけはっきりした発音を心がけ、繰り返してもダメです。そのうちに器械の方も工夫を加えてきて、「ジョージア州のアトランタのことですか?」「ルイジアナ州のニューオーリンズのことですか?」と。私は、ここぞとばかり「イエス、イエス、そのとおりです!」と大声で返事しました。そしてここから先は係りの社員が出て、フライト時間や料金の払込み手続きへと話が進んだのです。



ニューオーリンズに着くと、私はアメリカに住んで長いという日本人のNさんにこの経過を話してみました。するとNさん曰く。

「そう、相手が人間であればなんとか聞き取ろうとしてくれる。でも、器械はそれができないから短絡的に“NO”の反応が出てしまうのです」「それに日本人はどうしても『R』と『L』の発音の区別ができない。ATLANTAの『L』、NEWORLEANSの『R』と『L』ですね。自分もアメリカに来たばかりに『私はご飯が好きです』というのに、発音が『ご飯<米>(ライス)』のRICEでなく『しらみ』のLICEになっていて、『オイ、Nには近寄るなヨ。しらみが好きだって言っている』ってからかわれたこともあったんですよ。いつになっても「英語の発音恐るべし」ですね。

【写真:

ニューオーリンズ・ミシシッピ河畔】からサッってからかわれたこともあったんですよ

いつになっても「英語の発音恐るべし」ですね。

